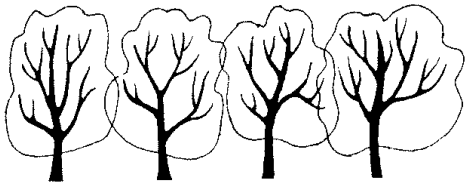
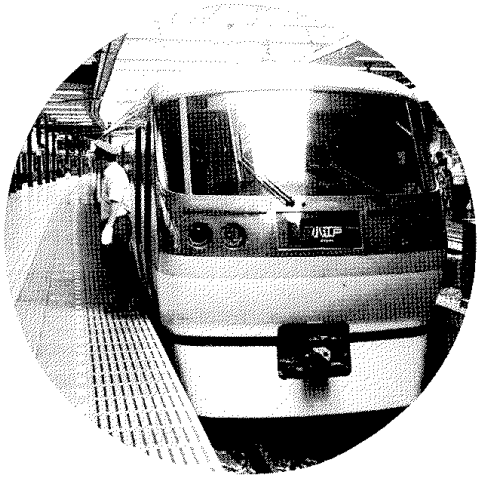


音の散歩路

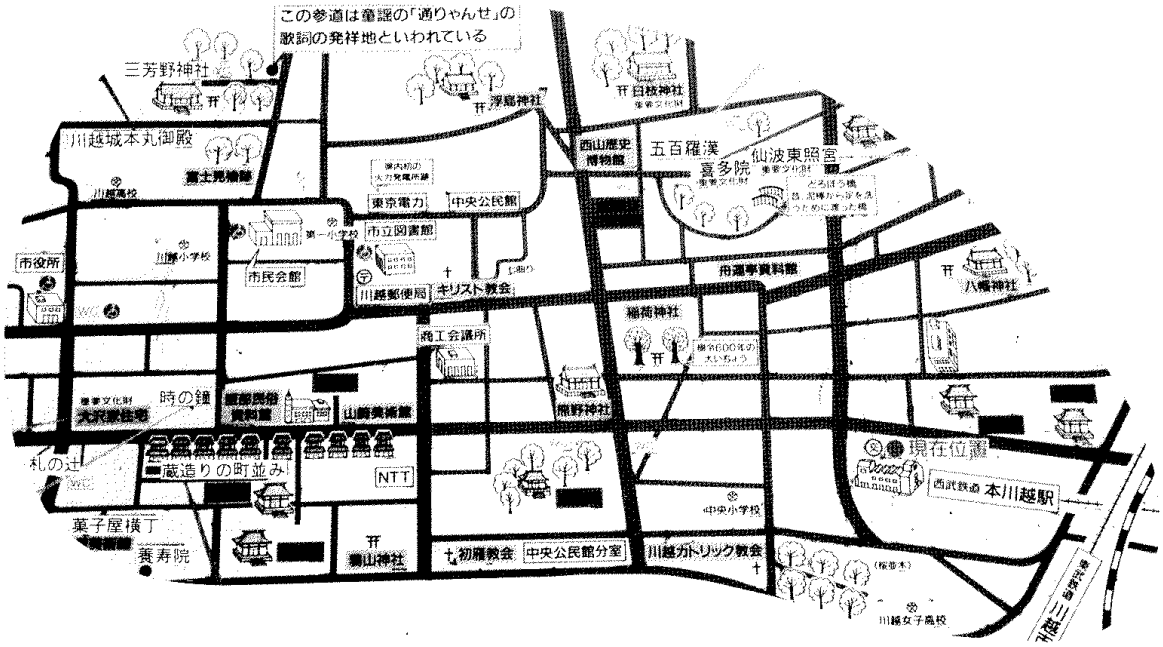
～小江戸（こえど）・川越　そぞろ歩き～

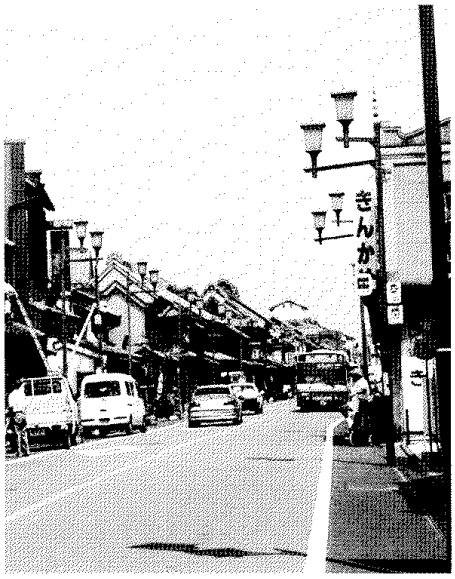
西武新宿線の新宿より小江戸号（写真－１）にゆられて四十数分で終点の本川越に到着する。都心から約30キロに位置し、昔より江戸防備の要所として栄えた江戸の香りを色濃く残した町である。観光案内図からも分かるようにこじんまりとした町で１日かけてそぞろ歩くには手頃な大きさである。

改札口を出るとすぐに小江戸巡回バス（表紙の写真）が目に付く。これに乗っても良いが、のんびり歩くほうが思わぬ面白いものに出会える。左手方向、市役所方面に向かって歩く。時代劇のセットの様なコンビニや昭和中頃の面影を残す商店街を横目に15分程で蔵造りが視界に



写真－１



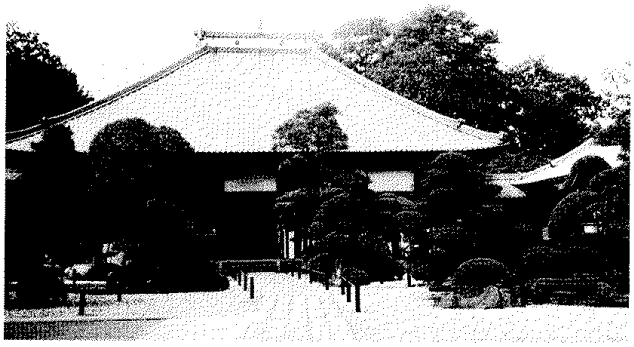


写真－2

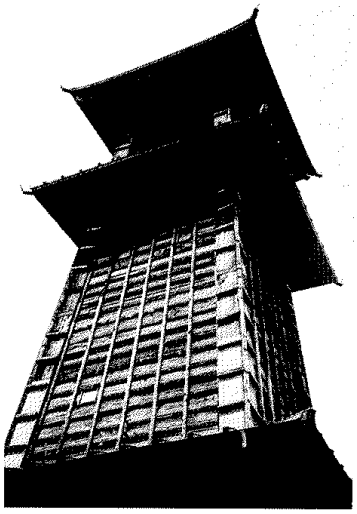
入り(写真－2)、少し行けば時の鐘にも出会える。双方とも川越のシンボルである。蔵(写真－3)は明治26年(1893年)3月の川越大火の後で造られたものがほとんどである。時の鐘(写真－4、表紙の写真)も同じ大火で焼失して再建された4代目のものである。やぐらは3層になっていて16メートルの高さがあり、今でも1日4回自動装置で時を知らせている。尚、時の鐘は環境省主催「日本の音風景百選」に選ばれている。

蔵の立ち並ぶ先の小道を入り、養寿院(写真－5)を訪れる。昔、川越城中で夜な夜な聞こえてくる矢叫びや蹄の音に困り果てて易者に占ってもらったところ「堀川夜討ちの屏風」が災い

写真－3



写真－5



写真－4

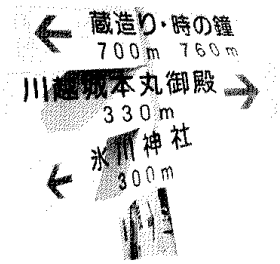
写真－6

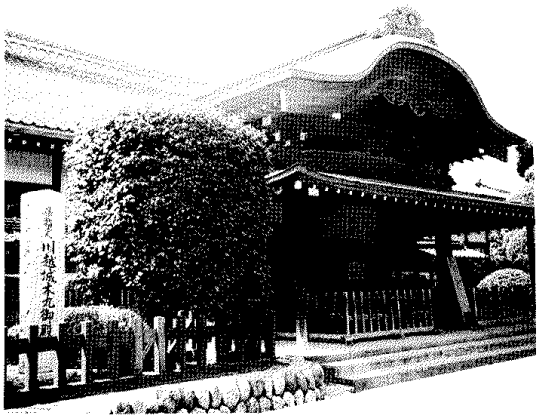
していると進言され、養寿院に納めたところ聞こえなくなったという。今でも秘蔵の屏風画として養寿院にあるが公開はしていない。

養寿院の脇には菓子屋横丁（写真－6）がある。江戸時代には養寿院の門前町でもあった。店内（写真－7）に入ると子供の頃にタイムスリップする。ちゃぶ台を囲んだ子供達はちょこんとかしこまって嬉々として川越名物のさつま芋のソフトクリームをなめている。気が向けば芋を使った地場のビールやワインまで賞味できる。菓子屋横丁は環境省主催「かおり風景百選」に選ばれている。

藩のお触れの高札があったという札の辻から、市役所を左手に見ながら川越城本丸御殿へ向か

写真－7





写真－8

う。嘉永元年（1848年）の建造で今は玄関と大広間（写真－8）が残っている。その玄関からすぐの所に三芳野神社（写真－9）がある。童謡「通りゃんせ」発祥の地といわれている。城奥の天神様といわれ、町人の参詣がなかなか難しく、その様子を歌ったという。

ここから喜多院（写真－10）に向かう。徳川三代将軍家光公の時代に家光誕生の間と春日局の化粧の間が江戸城から移築されて残っている。院内をめぐるとうぐいす張りの廊下(写真－11)が気持ちよくキュッキュッと鳴るのに出会う。境内には五百羅漢があり、ところ狭しと鎮座している中には〝音の羅漢様〟（写真－12）も見いだせる。

喜多院一帯は仙波といい、童謡「あんたがたどこさ」が生まれたという説もある。幕末のこ

写真－9

写真－11

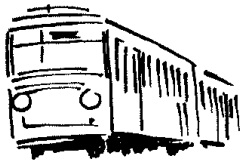
写真－10

写真－12

と、倒幕のため喜多院の裏山に薩長連合軍が駐屯し、その兵士と地元の子供とのやりとりから生まれたという。（太田信一郎「童歌を訪ねて」）別の資料では歌の舞台は熊本であるとする説もあり、実際のところはっきりしたことは分かっていない。

又、喜多院には音にまつわる伝説がある。子供達が蛇をいじめているところに喜多院の坊さんが出くわし、かわいそうに思った坊さんは蛇を譲り受けて山内に放した。やがて大きくなった蛇は夜な夜な田畑を荒らすようになり、怒った坊さんが「私が鈴を鳴らすまでは出てきてはいけない」と仙波の池に封じ込めてしまったという。それが元で「山内禁鈴（さんないきんれい）」といって境内で

鈴を鳴らすと大蛇のたたりがあると伝えられている。しかし、売店で売っている鈴にはちゃんと振り子がついているから面白い。

境内には家康を祭る仙波東照宮もある。亡くなった家康を久能山から日光に移葬する際に喜多院に4日間とう留した因縁で寛永10年（1633年）に創建された。

川越は江戸の息吹を感じながら何時しか子供の頃にかえって童謡を口ずさんでいる散歩路である。JR川越線（埼京線乗り入れ）又は東武東上線でも行ける。（財団　江沢記）